

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 6 月 22 日現在

機関番号：13701

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19K00759

研究課題名(和文) 小学校教員を対象としたWillingness to Communicateの研究

研究課題名(英文) A Survey on Elementary School Teacher's WTC and Related Variables

研究代表者

瀧沢 広人 (Takizawa, Hiroto)

岐阜大学・教育学部・准教授

研究者番号：30824940

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、小学校教員のWillingness to Communicate(WTC)の状況を調査し、L2における小学校教員のWTCの関連要因を確認することにある。まず、(1) 先行研究を基に調査用紙を作成、予備調査を重ね、質問紙を決定した。次に、(2) 小学校教員185名を対象に、本調査を行った。(3) その調査データを基に、小学校教員のWTCの傾向を把握し、L2WTCのモデルを構築した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

コミュニケーションを図ろうとする意思(Willingness to Communicate; WTC)の研究は、大学生、高校生、中学生、小学生を対象に調査が行われてきている。しかし、肝心の教員のWTCについては調査がなされていない。そこで、2020年より外国語が教科となった小学校において、小学校教員のWTCは、どの程度を保持しているのかを明らかにし、L2WTCの関連要因について整理する。このことにより、自治体等における小学校教員英語研修において、教員のコミュニケーションを図ろうとする態度につなげるための研修内容の検討材料となることが期待できる。

研究成果の概要(英文)：The goals of this study were to do research on how much elementary school teachers own "Willingness to Communicate" and to develop a L2WTC model for elementary school teachers. First of all, preliminary investigations were done in order to fix the questionnaire. Second, the questionnaire was conducted with the 185 elementary school teachers. Lastly, the data was examined to find out how teachers own WTC and to develop teacher's L2WTC model.

研究分野：英語教育 第二言語習得論

キーワード：WTC 小学校教員 研修 動機付け 外国語教育

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

2020年度より、小学校外国語が教科となり、週2時間の英語の授業が行われることになった。文部科学省(2015)は、「小学校外国語活動実施状況調査」において、「英語が苦手である」と回答した小学校教員は67.3%、「自信を持って指導している」と回答した小学校教員は34.6%という調査結果を示している。当然ながら、英語をコミュニケーション・ツールと考えた場合、コミュニケーションを図る意思も大変重要である。しかしながら、実際のコミュニケーションの場面において、積極的にコミュニケーションを図ろうとする人がいる反面、コミュニケーションを図ろうとしない人もいる。それは何が要因となっているのだろうか。それを解明する分野がWillingness to Communicate(以下、WTC)である。WTC研究は、海外において、第一言語を用いてのWTCから、第二言語を用いてのWTCへと進み、日本では、外国語環境下におけるEFLとしてのWTC研究が行われた(Yashima 2002)。Yashimaは「国際的志向性」という概念を用い、日本におけるL2 WTCの研究は、「国際的志向性」を中心に添えた。そして、現在までに、調査対象を大学生(大学院生を含む)から、高校生、中学生、そして小学生と、「学習者」を対象とした研究が行われている。

では、肝心の英語を指導する教員のWTCはどうだろうか。2020年度より、小学校外国語が必修となった現在、指導者(教員)がどの程度、英語を用いてのWTCがあるのか調べておく必要があると考えた。

2. 研究の目的

本研究における目的は、小学校教員のWTCを調査し、教員のコミュニケーションを図ろうとする意思についての実態を把握することにある。研究課題は、次の2つである。

RQ1 小学校教員のL1 WTC及びL2 WTCは、どのような傾向を示すか。

RQ2 小学校教員のL2 WTCとその関連要因の間には、どのような関係性が見られるか。

3. 研究の方法

(1) 本調査の実施

予備調査を4回(令和元年6月、12月、令和2年12月、令和3年1月)実施し、先行研究に基づく調査項目を精査し、本調査を実施した(令和3年2月)。参加者は、岐阜県3校、東京都3校、埼玉県6校の計12校の公立小学校に対し、学校長の許可を得て実施した。その結果、185名から回答を得た。質問項目により、記入漏れがあるため、有効回答数は調査項目により異なり、調査1及び調査2は184、調査3～調査9は175となった。

(2) 使用した質問紙

調査項目は、調査1～調査9の計122問からなる。

項目	内容	設問数	作成の手順
調査1	L2 WTC	12	McCroskey(1992)の尺度を用い、WTCを直接測る12項目のみ取り出し提示した。
調査2	L1 WTC	12	
調査3	国際的志向性	24	Yashima(2002, 2009)の調査用紙から、教員用に質問紙項目を19項目を使用し、一部文言を替えた。他5項目は独自に作成した
調査4	学習意欲	16	小学校教員向けとして独自に作成した。
調査5	コミュニケーション不安	12	
調査6	英語能力の認知	12	『CEFR-Jを活用するための‘Can Do’Descriptorリスト』(投野由紀夫)から、「聞くこと」「話すこと(やり取り)」「話すこと(発表)」のA1, A2, B1, B2の中から1つずつ選び、計12項目を作成した。
調査7	外向性	8	物井(2015)の児童向けを、教師向けの文言に置き換えた。
調査8	教師WTC	14	教師向けのWTCとして独自に作成した。
調査9	Teacher Immediacy (教師親密性態度)	12	Miao(2009:120,122)より12項目を取り出し作成した。
合計		122	

4. 研究成果

小学校教員の WTC の傾向

(1) 小学校教員の L2 及び L1WTC と先行研究

小学校教員の L1 WTC の平均は 54.1 であり、L2 WTC は 33.0 であった（表 1）。この結果は大変興味深い。Yashima (1998) の先行研究とほぼ数値が一致しているのである。Yashima は大学生への調査ではあったが、これらの数値が、およその日本人の WTC と言ってよいのではないかと考える。しかしながら、国際的な WTC と比較すると、日本人の L1WTC は、低い傾向にある。この考察として、日本人のもつ文化が影響していると考えられる。低コンテクスト文化の欧米では、伝えることに意味があり、コミュニケーションを頻繁に行うことが重要と考えるが、日本のような高コンテクスト文化のもつ社会では、それほど詳細に伝えなくてもお互いが理解し合おうとする。このことから、積極的にコミュニケーションを図ろうとする意思が薄れるのではないかと考える。また、学校教育においても、どうしても先生の話聞くことが多く、発言は教師によってコントロールされている。自発的な発言も限られていることも要因として考えられる。

表 1. 小学校教員の WTC と先行研究との比較

	小学校教員		Yashima (1998)		McCroskey (1992)					
	L2WTC	L1WTC	L2WTC	L1WTC	U.S.	Sweden	Australia	Micronesia	Finland	Estonia
Total WTC	33.0	54.1	32.9	54.5	65.2	58.1	55.6	47.3	54.6	54.8

また、L1 WTC 及び、L2 WTC の得点をヒストグラムで表したのが、図 1 及び、図 2 である。L1 WTC と L2 WTC には約 21 ポイントの差が見られるが、第二言語を用いた時のコミュニケーションを図ろうとする意思には、低い傾向にあることが図からも確認できた。

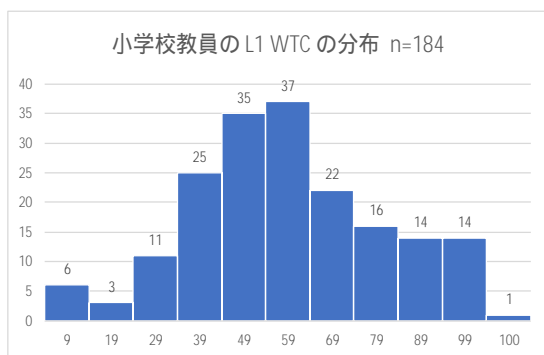


図 1 L1 WTC のヒストグラム

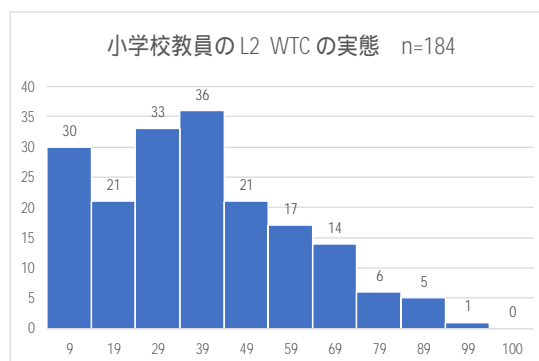


図 2 L2 WTC のヒストグラム

(2) 「状況」や「相手」による WTC の傾向

大人数よりも少人数で WTC は高まる

コミュニケーションを行う状況や相手についても、先行研究を支持する結果が見られた。コミュニケーションを図ろうとする「相手」及び「状況」について集計した結果を、表 2 に示す。表 2 により、少人数から大人数へとなるにつれ、L1 も L2 も WTC の数値が低くなっていくことがわかる。このことは、大人数の時よりも少ない人数の方が、コミュニケーションを図ろうとする気持ちが強くなることを示している。

初めて会う人では、少人数より小グループの方が話しやすい

の通り、少人数の方が大人数よりもコミュニケーションを図ろうとする割合は高いにも関わらず、「状況」により、話しやすい割合は変わることが示された。表 2 を見ると、L2 WTC の 01 と 10 では、10 の方がコミュニケーションを図ろうとする割合が高い。つまり、初めて会う人の場合、「特定の 1 人 (01)」と話すより、「小グループ (10)」の方が話しやすいことを示している。

これは、L1 WTC にも同様のことが言え、L1 WTC で見ても、特定の 1 人と話すより、小グループの方が、WTC の数値が高くなっている。このことから、初めて会う人の場合、特定の 1 人に対してよりも、小グループの中でのの方がコミュニケーションを図りやすいということがわかる。

表2. 「状況」や「相手」による WTC Subscore の記述統計 (n=184)

	L2 WTC		L1 WTC	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
Total WTC	33.0	21.6	54.1	22.2
01 列に並んでいる時、初めて会う(外国)人と話をする	15.6	19.9	24.2	29.0
02 列に並んでいる時、(外国人の)友人と話をする。	67.0	33.0	89.4	23.9
03 列に並んでいる時、知り合いの(外国)人と話をする。	61.2	31.3	82.2	25.2
04 知らない(外国)人の一団に、プレゼンをする。	14.1	25.6	28.4	34.5
05 (外国人の)友人の一団に、プレゼンをする。	32.2	33.6	55.7	34.6
06 知り合いの(外国)人の一団に、プレゼンをする。	29.6	32.4	50.6	34.3
07 知らない(外国)人の大きな集まりで話をする。	11.6	21.7	25.9	30.5
08 (外国人の)友人の大きな集まりで話をする。	30.8	31.2	57.3	32.2
09 知り合いの(外国)人の大きな集まりで話をする。	28.3	30.2	52.1	33.5
10 知らない(外国)人の小グループの中で話をする。	17.9	25.2	34.3	32.5
11 (外国人の)友人の小グループの中で話をする。	46.9	34.7	74.0	30.8
12 知り合いの(外国)人の小グループの中で話をする。	41.3	33.2	68.0	30.6

(3) L1WTC と L2WTC との相関関係

コミュニケーションの状況や相手について、両者の間で似た傾向がみられたため、相関係数を確認した。すると、中程度の相関 ($r=.596$, $p<.01$) が確認された(表3)。母語と第二言語の習得の順序性から考えると、第二言語の WTC が高いと第一言語の WTC も高くなることは予測しやすく、第一言語が第二言語に影響を与えているものと考え。よって、小学校教員は、「母語において、コミュニケーションをFIGろうとする意思が強い」と、英語においてもコミュニケーションをFIGろうとする意思が強い傾向にある」と言えるのではないかと考える。相関係数については、Yashima (1998) よりも、やや強く出ていることがわかる。

表3. L1 WTC と L2 WTC の相関 (n=184)

L1 WTCとL2 WTCの相関	小学校教員	八島(1998)
Total Score	.60**	.27**
Public	.54**	.33***
Meeting	.60**	.36***
Group	.59**	.40***
Dyad	.37**	.24*
Stranger	.59**	.21*
Acquaintance	.59**	.33***
Friend	.53**	.30**

小学校教員の L2WTC 関連要因

(1) 関連要因の因子相関

L2WTC の関連要因を確認するために、調査3～調査9の7項目で、検証的因子分析(最尤法・プロマックス回転)を行った。複数回の因子分析を行った結果、18項目を分析から外した。それに、L1WTC 及び L2WTC を加え、9つの因子間で相関行列を求めた(表4)。その結果、「L2 WTC」と相関が見られたのは、「国際的志向性」「コミュニケーション不安」「英語コミュニケーション能力の認知」「学習意欲」「教師用 WTC」の5因子であった。

表4. L1 WTC 及び L2 WTC と関連要因の因子間の相関行列表 (n=175)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9
1 L1_WTC	-								
2 L2_WTC	.588**	-							
3 国際的志向性	.261**	.361**	-						
4 コミュニケーション不安	-.157*	-.348**	-.148	-					
5 英語コミュニケーション能力の認知	.114	.370**	.230**	-.586**	-				
6 学習意欲	.236**	.297**	.619**	-.075	.279**	-			
7 教師親密性態度	.243**	.136	.223**	-.052	.019	.200**	-		
8 外向性	.249**	.126	.297**	.012	.036	.211**	.305**	-	
9 教師_WTC	.306**	.417**	.475**	-.426**	.442**	.472**	.281**	.256**	-

*=p<.05 **=p<.01

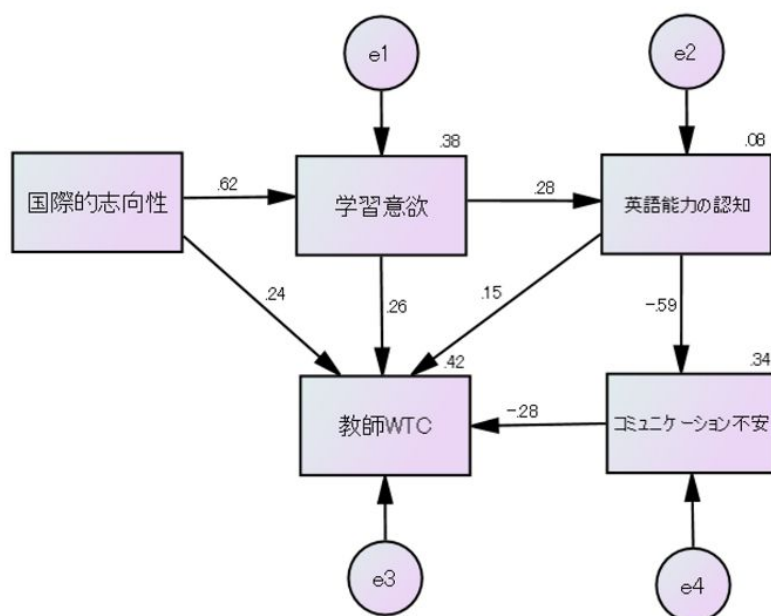
(2) 小学校教員の L2WTC モデルの作成

以上の調査結果から、小学校教員の L2WTC モデルの構築を試みた。分析の結果、FIG 3 のような結果が得られた。推定値は5%水準で全て有意であった。また、適合度指標を確認したところ、 $\chi^2(3)=5.240$, $p=.155$, $GFI=.988$, $AGFI=.940$, $RMR=.020$, $SRMR=.031$, $CFI=.991$, $TLI=.972$, $RMSEA(90\%CI=.00,.157)=.066$ とモデルのデータへの当てはまりが良い結果が得られた。

モデルにより、小学校教員にとっての L2WTC は、「国際的志向性」と「(英語への)学習意欲」が直接的に働きかけていることがわかった。同時に、教師の「(英語への)学習意欲」に強い

影響を与えているのが「国際的志向性」であることがわかった。また、英語能力が高いと感じている（英語能力の認知）教員ほど、コミュニケーションにおける不安は軽減し、不安軽減が、教員の英語を用いて「コミュニケーションを図ろうとする意思」に影響を与えていることが確認できた。これらのことから、教員の L2WTC を高めるためには、実際に、話す・聞く等の英語能力を高め、英語を用いてのコミュニケーションにおける自信を持たせることが、教員の L2WTC を高める方策となると考える。また、「国際的志向性」も重要な概念である。海外への興味や異文化への関心、異文化へ溶け込もうとする気持ちも L2WTC に影響を与える。そこで、学校に勤めている外国人の ALT(英語指導助手)と意図的に交流する機会をもつこと等を通じ、国際的志向性が高まりから、学習意欲、そして、L2WTC の高まりへとつながると考える。

図 3. 小学校教員の L2WTC モデル



< 引用文献 >

- McCroskey J.C. (1992). Reliability and Validity of the Willingness to Communicate Scale. *Communication Quarterly*, 40, 16-25.
- Miao, Y. (2009). *Willingness to Communicate of Foreign Language Learners A WTC Study in a Chinese setting*, VDM Verlag Dr. Muller Aktiengesellschaft & Co.
- 文部科学省 (2015). 「小学校外国語活動実施状況調査」
https://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1362148.htm
- 物井尚子 (2015). 「日本人児童の WTC モデルの構築 - 質問紙調査からみえてくるもの - 」
『日本児童英語教育学会紀要 第 34 号』
- Yashima, T (1998). Willingness to Communicate in a Foreign Language: A Preliminary Study, 『関西大学総合情報学部紀要 情報教育』 第 9 号, 121-134.
- Yashima, T (2002). Willingness to Communicate in as Second Language: The Japanese EFL Context, *Modern Language Journal*, 86, 55-66.
- Yashima, T. (2009). International posture and the ideal L2 self in the Japanese EFL Context. In Dörnyei, Z. and Ushioda, E. (Eds.), *Motivation, language identity and the L2 self* 144-163. Clevedon, UK.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 瀧沢 広人
2. 発表標題 小学校教員を対象としたWillingness to Communicate調査研究 小学校教員はどの程度、L2WTCを兼ね備えているのか？－
3. 学会等名 小学校英語教育学会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------